

# 馮夢龍『山歌』と妓女

大木 康

## はじめに

(本稿は、2008年9月1日、万葉古代学研究所において同所主宰共同研究「旅と万葉集」の一環として行った発表の草稿に手を加えたものである。)

このたびはお招きいただき、ありがとうございました。今日は、「馮夢龍『山歌』と妓女」と題してお話させていただきます。

全体のテーマが「旅と万葉集」ですので、まずはこの点について簡単に触れておきたいと思います。日本でも『万葉集』の人々は、かなり旅をしていると思います。この点、かつての中国の文学者、詩人も同様です。中国の官僚の登用制度である科挙の制度は、試験の段階ごとに、生まれ故郷の町から次第に都へと近づいてゆく制度といいかえることもできます。試験の各段階ごとに、受験生は旅をしました。さらに、試験に合格して官僚になれば、今度は地方官としての赴任が待っており、都と任地の間を旅して歩いたわけです。唐代の杜甫、宋代の蘇軾、この二人の場合、戦乱あるいは左遷といった要素が強いことはたしかですが、両者の一生の行跡図を見ると、彼らが広い中国をよく歩き回っている様子がうかがえます。この点、京都からほとんど足を踏み出さずに歌を詠んでいた平安朝の歌人たち、貴族たちとはちがっています。

ただ、そうして各地をめぐる彼らの旅の実際の様子については、あまりよくわかりませんでした。たまたま清代中期の広東の人、林伯桐(1774~1844)が、広東から科挙の試験のため北京に赴いた心得を記した『公車見聞録』という本をみつけ、例えば船はどのように雇うのか、宿屋にはどのように泊まるのか、など当時の旅の具体的な様子が少しわかってきました。これについては、拙著『原文で楽しむ 明清文人の小品世界』(中国書店 2006)第八章「受験生の旅—林伯桐『公車見聞録』」で紹介いたしましたので、ご覧いただければさいわいです。

さて、わたしがこれまで専門として勉強してまいりましたのは、中国文学、なかでも明代の末期にあたる時代、年号で申しますと、嘉靖(1522~1566)、隆慶(1567~1572)、万曆(1573~1620)、天啓(1621~1627)、崇禎(1628~1644)といった時代です。日本では、ちょうど1600年に関ヶ原の戦いがあり、1603年に江戸幕府が開かれましたが、1600年をまん中にして百年ほどの時代です。

この時代の中国文学の特徴の一つは、『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』『金瓶梅』など長編の白話小説、あるいは「三言二拍」など短篇の白話小説作品が、突然のようにあらわれたことです。またこの時代は、白話小説ばかりでなく、戯曲や小説など、いわゆる通俗文学が盛んになった時代です。こうした文学現象がどうしておこったのか、それが自分にとっての大きな課題になっております。

この問題を考えるにあたって、短篇白話小説集「三言」の編者である蘇州の人、馮夢龍(1574~1646)は、通俗文学に深く関わりながら、その伝記がつかめるという点で、手がかりとなしうる数少ない人の一人です。わたしはこれまで、この馮夢龍を出発点にして、「三言」を中心とするその作品のほか、科挙(『不平の中国文学史』筑摩書房 1996)、妓女と色町(『中国遊里空間 明清秦淮妓女の世界』青土社 2002)、出版(『明末江南の出版文化』研文出版 2004)などの

問題について考えてまいりました。なかでも、当時の通俗文学の隆盛の問題を考える上で格好の材料が、馮夢龍が編んだ蘇州の民謡集である『山歌』です（これについては『馮夢龍『山歌』の研究』勁草書房 2003）。

『山歌』は、全部で10巻あり、約380首の山歌を収めています。ここでいう山歌とは、蘇州地方の民謡ですが、その大部分は、男女の色恋の歌で、かなりあやしい歌も含まれております。馮夢龍自身は、それなりに歴とした知識人でしたが、彼がいったいなぜこのような春歌集を編纂したのか。これが、当時の通俗文学の隆盛を考えるよいヒントになるわけです。

### （一）馮夢龍の『山歌』

それでは、馮夢龍の『山歌』について見ていくことにしましょう。『山歌』には、冒頭に馮夢龍による序文「叙山歌」がついており、その編纂の意図について語っています。

言葉あって以来、代々歌謡があった。太史が集めたもの（『詩経』）で、風と雅とをともに評価しているのは尊いことである。『楚辞』や唐詩になると、美しさあでやかさを競って、民間の性情の響きは、詩壇に列せられなくなってしまい、別に山歌といわれるようになった。（山歌は）田夫野豎が口から出るにまかせて思いを寄せたものことで、薦紳学士家の口にするものではない。

詩壇に列せられず、薦紳学士家の口にのぼらないがために、歌はますます軽はずみになり、歌う者の心もますます浅薄になっていった。今盛んに流行しているのは、みな私情の曲ばかりである。だがそうはいっても、「桑間濮上」（淫猥な歌）は、「国風」ではこれをそしているが、孔子はこれを採録している。なぜなら、情が真であって、廃することができないからである。山歌はひどく俚俗なものではあっても、どうして鄭衛の遺でないことがあろうか。

そのうえ、今は末の世で、仮の詩文はあっても、仮の山歌はない。なぜなら、山歌は詩文と競争しようということがないから、仮がないのである。かりそめにも仮がないからには、わたしがこれによって真を存するよすがにしようすることも、可能なのではないだろうか。

さて、そして今の人々が、昔太史によって集められたものはこれこれであり、最近の民間に残っているものがしかじかであることを思えば、なお世を論ずる材料にはできるであろう。もし男女の真情を借りて、名教の偽業たることを暴くことができるならば、その効能は『掛枝児』と同じことになろう。それで、『掛枝児』を採録した後で『山歌』に及んだのである。

『詩経』には「風」と「雅」があるわけですが、馮夢龍は、それによりながら、

(A) 「風」—民間性情の響—田夫野豎—山歌—（真）

(B) 「雅」—『楚辞』・唐詩—薦紳学士家—詩壇の詩—（仮）

以上二つの系列を対比させています。山歌を、このうち「風」の末裔として位置づけた上で、この(A)の系列の方を高く評価しているのです。一つには、山歌のような通俗歌謡に『詩経』の地位を認めることで、このような卑俗な歌を集めたことに対する批判をかわそうという意図を見ることができますが、実はそればかりでなく、馮夢龍の場合、本来、中国の正統的文学として価値を認められてきた「詩

壇の詩」は、いまや生気を失った「仮」のものとなり果てており、それに対して、民間の山歌の方に「真」が存するのだという、より積極的な山歌評価を見ることができるわけです。おそらくはここに見られるような、「真詩は民間にあり」という思想、あるいは一種「民衆の発見」という事態が、明代における通俗文学の根底にあったのではないかと考えられます。その意味でも、この「叙山歌」は重要な文献だと思います。

馮夢龍『山歌』は、歌の体裁と内容によって整理編集され、次のような構成になっています。

卷一	私情四句	
卷二	私情四句	
卷三	私情四句	
卷四	私情四句	
卷五	雑歌四句	
卷六	詠物四句	以上 四句山歌
卷七	私情雑体	
卷八	私情長歌	
卷九	雑詠長歌	以上 中・長篇山歌
卷十	桐城時興歌	桐城時興歌

卷一から卷六までが、『山歌』の本体ともいえる四句の山歌です。卷七から卷九は中編、長編の山歌。卷十は安徽の歌謡である「桐城時興歌」です。

ここで『山歌』からいくつか歌の実例を見てみましょう。

「笑」(卷一)

東南風起打斜来  
好朵鮮花葉上開  
後生娘子家没要嘻嘻笑  
多少私情笑裏来

「笑み」

東南の風が斜めに吹いて来て  
一輪のみずみずしい花が葉の上に開いた  
若い娘さん、にっこり愛想笑いをしてはいけないよ  
どれだけ多くの恋が微笑みからはじまったことか

これは『山歌』全体の冒頭に置かれている歌です。卷一は、おおむね恋の過程に沿って編集されているように思われます。前半の二句は、春の自然の描写であり、後半二句が人事になります。恋のはじまりという人事を導くものとして、春風が吹いて花が咲くという自然が描かれているわけで、これは『詩経』でいう「興」の働きをしています。「東南風起打斜来」の句は、一種の決まり文句にもなっており、『山歌』中にいくつか登場します。

「儷」（巻二）

東南風起響愁愁  
郎道十六七歳箇嬌娘那亭儷  
百沸滾湯下弗得手  
散線無針難入頭

姐兒聽得説道弗要愁  
趁我後生正好儷  
偕了弗捉滾湯侵杓水  
拈線穿針便入頭

「ものにする」

東南の風がひゅうひゅう吹くとつらくなる  
十六七のかわいい娘にはどうにも手の出しようがない  
沸き立つスープの中に手は入れられないし  
ほつれた糸では針の穴を通せない

それを聴いて娘がいった。心配なんかいらないわ  
わたしの若い今のうちに、どうぞものにして結構  
煮えたったスープを汲むならひしゃくを使えばいいわ  
糸を撚って針に入れれば通るじゃないの

この歌は、二首の組歌になっており、男女の掛け合いになっています。あとで触れるように、山歌の歌われた場には、男女による歌の掛け合いの場があり、この歌などは、そうした場を反映するものと思われまゝ。次に巻六の「詠物」から一首。

「珠」（巻六）

結識私情好像珠子能  
円円一粒望你眼兒穿  
姐道郎呀、你弗来時我枕辺吊落子千千万  
没要因奴黄子了賤相看

「真珠」

彼女はまるで真珠のよう  
まるい一粒があなたの目で穴があくほど見つめられることを望みます（真珠だから穿、穴を穿つという動詞に結びつく）  
ねえあなた、あなたが来ないときには枕のそばに千も万も落ちています（涙の粒のこと）  
わたしが黄色くなった（古くなった＝年取った）からとっていやしい物と見ないでね

『山歌』の巻一から巻六は、いずれも四句の形式を持つ歌ですが、その前半の方では、どちらかと

いえば、恋に積極的な活発な女性が主人公であるのに対し、巻六においては、この歌のように、男に捨てられた女性の怨み節が中心になっているようです。これは、それぞれの巻に収められた歌の歌われた場のちがいに起因する性格の相違であると思われます。

これにつきましては、拙著『馮夢龍『山歌』の研究』の論考編第二章で論じておりますが、ごくかいつまんでご説明いたしますと、まず本来、山歌というのは、農村における祭りの歌でありました。これは唐代の資料ですが、『新編古今事文類聚』前集卷十一天時部、中秋「遇呉綵鸞」に引く『伝奇』に次のような資料があります。

鍾陵の西山に遊帷観がある。毎年中秋には、数十里にわたって車馬がひしめきあい、繁華街のようになる。豪傑たちは歌の上手な美女たちを多く呼び集め、夜、男たちと並んで立たせ、肩を組み足踏みならして歌い、応答の敏捷であった者を勝ちとした。太和（827～835）の末年、書生の文簫というものがあつた。観に行つて、一人の美しい娘を見かけた。彼女は次のような歌を歌つた。

若し能く相伴なつて仙壇に陟らば  
応に文簫の綵鸞に駕するを得べし  
自ら綉襦並びに甲帳有れば  
瓊台 雪霜の寒きを恐れざらん

生は、彼女は神仙だと思ひ、その場に釘付けになつてしまつた。彼女もまた文簫の方を見た。歌が終わると、彼女は一人で灯りを持ち、大きな松の木の間に入つていった。道が尽きようとする、山に登り、岩をよじて、危険を冒しながら登つていった。生はその足跡を追つていった。すると彼女は、「文簫さんではありませんか」といい、手を携へて山頂の平らな場所に連れていった。するとたちまち風雨が起つて、幔幕が破れ、机がひっくり返つた。急に仙童が天判を持ってあらわれた。判には「呉綵鸞は私欲を以て天機を洩らしたかどにより、謫して民の妻と為すこと一紀」とあつた。彼女はそれで生とともに山を下り鍾陵に歸つた。『伝奇』に見える。

これは、江西の鍾陵において、中秋の折に男女による一種の歌合戦が行われていたことを示す資料です。このように、長江の流域には、山歌を歌う祭りがあつたことを示す資料はほかにも存在します。馮夢龍『山歌』の基底にあつたのは、もとは農村で行われていた祭りの歌であつたと思ひます。

馮夢龍の生きた明末において、蘇州は、中国第一といつてもよい大都市でありました。それでは、どうしてそのような大都市に生きた馮夢龍が、こうした農村起源の歌を収集できたのでしょうか。当時の蘇州は、絹織物を中心とする軽工業都市であつて、その労働力は、各地の農村から流入した人々によつて支えられておりました。その彼らが、山歌を都市に持ち込んだのだと思ひます。乾隆『盛湖志』巻下「風俗」には、

中元の夜には、四郷の大勢の傭織たち、そして俗に曳花と称する者たちが、およそ数千名ばかり、東廟、そして昇明橋に集まつて、山歌の歌比べを行う。新しい歌を作つて、その騒ぎは朝まで続く。

との記述があり、都市において、大規模な山歌会が開かれていた様子がうかがえます。馮夢龍『山歌』には、蘇州城内の名勝を歌い込んだ山歌が見られますが、それらは、こうした蘇州に来てからの歌か

と思われます。

山歌は、やがて都市の色町で歌われ、さらに山歌の形式で文人による擬作が作られるようになります。巻六に収められた「詠物」の歌は、大部分が文人による擬作と思われ、先に見た消極的な女性像は、もともとあった都市俗曲の影響を受け、この段階で付け加わったものと思われるわけです。

という次第で、馮夢龍『山歌』には、これら、農村の歌、都市の歌、妓楼の歌、文人の擬作など、さまざまな来歴の歌が含まれているのです。

## (二) 山歌と妓女

次に、馮夢龍『山歌』と色町、妓女との関係について触れておくことにしたいと思います。馮夢龍には、『山歌』のほかに、本来色町を中心に流行していたと思われる俗曲を集めた『掛枝兒』があります。これらを見ると、妓女がその歌の取材源になっていることを示す注記が加えられているものを見ることができます。

最後の一篇は、名妓馮喜生から伝えられたものである。喜生は容貌が美しく、ひょうきん者であって、わたしとはよい仲間であった。ある人のところに嫁ぐ前の晩にわたしを招いて別れ話をした。夜半、わたしは辞去しようとして、喜にたずねた「なにか言い残したことはないか」と。喜は「あなたはまだ打草竿一首と呉歌一首とを覚えていますか。あなたに語っていないのはそれだけです」といってわたしのために歌ってくれた。打草竿はこれであり、その呉歌は、

河のむこうに野の花が咲いた

わたしのために取ってきてと恋人に声をかける

ねえあんた、あなたが花を取ってきたら、もともと花でお礼をしようと思っていたのよ

決してただ取ってはこさせないわよ（『山歌』巻二「採花」）

ああ、人面桃花、すでに夢の中の事になってしまった。ただこの二詞を見るたびに梁をめぐらすばらしい声が耳元によみがえるのである。佳人には二度と会い難いということが、むかしも今もかわらぬ思いである。つらいことだ。（馮夢龍『掛枝兒』巻四「送別」後評）

琵琶弾きの女性阿円は、新しい曲を作ることができ、そのうえ歌も上手だった。わたしは彼女のことを高く評価していた。わたしが『広掛枝兒』を出版しようとしているという話を聞きつけ、わたしのところにやってきてそれを勧め、またこの一篇を出して贈ってくれたのである。（『掛枝兒』巻三「帳」）

この一篇は、（南京秦淮）旧院の董四から聞いた。（『掛枝兒』巻八「船」）

この歌は松江の傅四から聞いた。傅もまた名妓である。（『山歌』巻七「篤癢」）

妓楼、妓女と歌との深いつながりを見ることができると思います。次に、先に文人たちが、山歌の形式による擬作を作ったと申しましたが、そうした歌が作られた場もまた、妓楼であったことを示す材料が残っています。蘇州の妓女の番付である宛瑜子『呉姫百媚』（万曆四十五年序刊本）、また南京の妓女の番付である為霖子『金陵百媚』（万曆四十六年序刊）です。このうち後者には、馮夢龍も

その編纂に関わっています。これらは、妓女たちについて花案という美人コンテストが行われ、その結果、上位にランクされた女性ごとに、それぞれの女性を詠み込んだ文人たちの詩、詞、曲などを収めたものです。例えば、『金陵百媚』で状元（科挙のトップ合格者が状元。美人コンテストも科挙を模して行われた）になっている董年という妓女については、七言律詩、清平樂、長相思（この二者は詞）、吳歌、掛枝兒、曲（散曲）が収められています。この「吳歌」は、すなわち山歌のことです。それは、

姐兒生来好似一介丹桂花  
幾介好人折了又与佢人拿  
姐道我介郎呀、花盛開時不与那衆人採朶子去  
那介人能採得幾些々

彼女は生まれつき丹桂花のよう  
何人かが折り取って行ったらまた誰かが持って行く  
ねえあんた、花の盛りにたくさんの人が採って行ってくれなかったら  
あんたひとりじゃいくらも採れないわよ

といった歌です。

明末における俗曲の流行について、沈徳符『万曆野獲編』巻二十五「時尚小曲」が次のように記しています。

元人の小令（小唄）は、燕・趙の地（河北、山西）で流行していたが、後に次第に広がり、日に日に盛んになっていった。宣徳・正統から成化・弘治以後になると、中原ではまた、「鎖南枝」「傍粧台」「山坡羊」の類が流行した。李空同先生（李夢陽）が、慶陽（甘肅）から汴梁に移り住んで、これを聞き、国風の後を継ぐことができるものだといわれた。何大復（何景明）が引き続いてやってきて、またこれを酷愛した。今でも伝わっている「泥捏人」及び「鞋打卦」「熬髮髻」の三首が、三つの曲牌の代表作である。それから後にはまた、「耍孩兒」「駐雲飛」「醉太平」などの三曲があったが、前の三曲ほどにははやらなかった。嘉靖・隆慶年間になると、「鬪五更」「寄生草」「羅江怨」「哭皇天」「乾荷葉」「粉紅蓮」「桐城歌」「銀紐絲」の類が盛んになって、両淮から江南にまで至った。次第に詞曲から遠ざかってゆき、ただ淫猥な情態を描いて、すこしばかり抑揚をそなえるだけになってしまった。近年にはまた、「打棗竿」「掛枝兒」の二曲があらわれた。そのメロディーはだいたい似通っているが、南北を問わず、男女を問わず、老幼貴賤を問わず、誰も彼もがそれを習いおぼえ、また誰も彼もがそれを好んだ。かくして、刊行されてまとまった書物となるに至り、世をこぞって伝誦し、人々の心にしみこんでいった。そのメロディーがどこから起こったのかわからないが、まことにおどろくべきことである。

これによって、それぞれの歌が全国的に流行していた様子を見ることができます。おそらく、当時における歌の全国的流行についても、各地の妓楼が、その中継地点、発信地になっていたものと思われる。

以上ごく簡単に、馮夢龍の歌謡集『山歌』と妓女についてご報告させていただきました。『山歌』

に見える農村の祭りの歌や妓女（遊女）と歌などをめぐっては、あるいは『万葉集』の世界とも重なるところもあるかもしれません。いろいろお教えいただければ幸いです。